2018年度入学試験問題

国　　語

（試験時間　15：00〜16：00　60分）

1．解答用紙には，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。

2．解答は，必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となりますので注意してください。

3．解答は，HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。

4．解答用紙を折り曲げたり，汚したりしないでください。また，マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きに使用しないでください。

5．解答用紙には，必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。

6．マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないよう特に注意してください。

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（45点）

その昔、聖なるテクストを読む人々、すなわち修道士たちは、反芻動物である牛にたとえられていたという。テクストをゆっくりと声に出して読み、幾度も噛みしめていたからだ。文字どおり「味読」していたのである。そこにはテクストを「反芻」することによって、その(1)シンオウの意味を把握し、しっかりと消化吸収できるのだという観念が強く働いていた。

ところが十三世紀頃をさかいにして、こうした「聖なる読書」に代わり「俗なる読書」、いいかえれば勉学のための読書が前面に出てきたという。時代は大学の誕生を、知識人の誕生を迎えつつあったのだ。そこでは「英知」ではなく、むしろ多くの「知識」を獲得することが読書の主たる目的とされた。そして知識を迅速にインプットするという必要性が、黙読という読書方法を普及させていく。声ではなく、目で読むという、新たな読書時代の誕生である。こうしてテクストは、段落・割付け・索引といった参照技術の発明・改良により、いわば視覚的秩序にのっとって分節化されていくであろう。同時に、知的情報の収蔵庫としての図書館の時代が開幕し、そこでも蔵書目録のような参照機能が備えられて、人はそうした情報を、目で走り読みしていく。

こうして書物が「祈り」から「学び」の支持体へと変容したことでどうなったか。極言するならば、英知は利便性の前に屈したのだ。集成や詞華集といった編集もの、煩瑣な注解、参照技術といった知の道具の発達と引き替えに、原典をひもとくことは稀になっていったらしい。しかもやがて、「講読」に代わって「討論」が知の主役を占め、スコラの達人たちは、詭弁という剣術を用いて相手を負かすことに熱中したともいう。

(2)こうした傾向に異議申し立てをして、書物を通じて古代の英知と、古代の人々との直接の出会いを求めようとしたのが、人文主義者と呼ばれる一連の知識人だ。彼らはギリシア・ローマの原典写本を探し出して、比較検討し、批評版を作成した。スコラの煩瑣な注解の森の奥から、テクストを解放したのである。そして彼らは、新しく誕生した活字印刷術によって、テクストを紙の上に固定させる。おまけに八つ折り判という文庫本の元祖までも発明して、古典テクストを好きな場所で自由に読みふけった

のだ。

ではユマニストたちは、いかなる読書を称揚したのか。彼らは「知識の深淵」の限界を悟っていた。たいせつなのは博覧キョウキ[3]にして言葉の達人となることではなくて、真理を体得することであった。読書行為が、「精細緻密[4]な読みと、度重なる瞑想」によって、テクストという骨をかみ砕き、その滋味ゆたかなエキスを一心不乱に啜る犬に喩えられていたことを想起しよう（ラブレー『ガルガンチュア』）。巨人にふさわしい圧倒的な知識量で、神学者・哲学者連中に「公開討論」を挑んでは、ばったばったと斬りまくる若年[5]のパンタグリュエルが、むしろ諷刺的に描き出されていることも忘れまい（『パンタグリュエル』）。

やがて国民国家形成のプロセスで、由緒正しいテクストの選別がおこなわれ、近代国家のアイデンティティを支える一群の「正典」が編成されていく。こうして十九世紀には「国文学」「フランス文学」「フランス史」といったディシプリンが成立する。現在、販売不振を伝えられる、古典や「かたい本」とは、基本的にはこうした知のパラダイムに連なるテクストであるにちがいない。もしかすると、われわれはそうしたテクストを、ルネサンス以来、さして変わらない読み方をしてきたのではないか。つまりテクストを熟読して、対話をおこなうことで、精神が涵養されるものと信じ、かくも長きにわたりよしとしてきたのではないのか。

こうした正典を中心とする読書の市場を支えてきた文化的秩序は、ポストモダンの時代以降、急速に崩壊しつつある。しかも今や、「書籍となってベッドに身を横たえていた文字は、再び起き出した」（ベンヤミン『一方通行路』）のである。われわれは、電子スクリーン上に碑文のように立ったテクストを相手にしているではないか。このようにメディアのありようが変化すれば、読書における心身的な表象も変わるにちがいないのである。

かつてユマニストは本文の確定にフシン[6]していたが、電脳空間[7]におけるテクスト概念は、きわめてファジーなものである。電子テクストならば、書体もサイズも、またページ・レイアウトも、読者が選択することができる。小説をダウンロードして、縦書きに変換して、書籍の感覚で読むこともできる。活字時代の読者は、みずからの読みによって、作品の世界を創造することはできたものの、テクストと書物の生成には関与できなかった。だが今や、それが可能になりつつあるのだ。また、自分の作品や

メッセージをホームページなどによって電脳空間に放出してやれば、この二十一世紀の公共空間では (8) には無限の読み手が待ち受けていることになる。テクストの作り手と読み手の境界線は、限りなくあやふやなものになっているのだ。テクストを統合する「作者という機能」（フーコー）は写本時代末期に、ペトラルカなどのユマニストによって意識化・対象化されたものであった。そして活字本というメディアが、作者の形象や作品の輪郭を、明確なものとしたのであった。ところが、なにやら写本時代にも似た、無定形なテクスト空間がふたたび出現しようとしているかに見えてくるのだ。

そうした無定形なテクスト空間について考えるために、ＲＰＧのようなデジタルストーリーを例にとろう。そこでは読者（プレイヤー）は、デジタルテクストとのインタープレイによって、物語空間を浮遊していく。プレイヤーは、各シークエンスごとに、与えられた枠のなかで気まぐれな選択をおこなう。こうした選択のモードの連鎖によって、ストーリーが形成されていくのだ。

これをあえて、読みの「ザッピング」と呼んでみたい。こうした読みの作法は、テクストを何度も「味読」して反省をおこなうところの、「かたい本」を読むふるまいとは、異質だといえる。それに代わって、時々刻々とスイッチするようなかたちによる知的領有という習慣が形成されつつあるのではないのか。そこでは、著者やその思想と対峙（たいじ）することで、自分のアイデンティティを問いなおすといったことは、おこなわれにくいように思われる。情報の大洪水時代にあっては、読書のみならずあらゆる分野で、受け手の意識も、こうしたスイッチング・スタイルへとシフトしているにちがいない。だとすれば、伝統的な読書習慣を継承していくのは、なかなかもってむずかしい。(9)「かたい本」の読者が再生産されにくい構造が形成されつつあるにちがいない。

さりとて人々は、本を読まなくなったのではない。読者の側は、果てしないテクスト空間を気ままに漂流したいという願望を抱いているのだ。こうなると学校教育で、良書を読みなさいと強制することがむしろ逆効果になるかもしれない。「読書」なんて、不自由なだけのものと誤解されかねないのだから。事実、フランスでは構造分析・修辞法等々、読みの精緻な技法を教授することが仇（あだ）となって、若者を読むことから遠ざけているという反省も生まれているらしい。

ところで、こうしたスイッチしていく読みや知のスタイルは、今に始まったことではない。ニューアカと称された才人たちが

一世を風靡したのは、もうふた昔近く前であったけれど、彼らの軽やかなスタイル、あるいはスキゾ的ブリコラージュと呼ばれたスタイルは、今やアカデミズムの領域でも確実に地歩を固めつつある。従来の「かたい本」が表象する「樹木的な」知に代わるような知の出現ということであったのか。そうした軽やかに浮遊する読みは、論文のスタイルにも影響を与えつつある。たとえば本文の論旨を支えると同時に学識の標識でもあった脚注・後注などの近代知の産物は、知識人の抑圧された自我の表象にすぎないとして、最近ではむしろ敬遠されがちだ。わたし自身にしても、最近は多くの注で身づくろいすることはなくなり、なるべく(10)ケイソウですませるようになった。着脱可能な身軽な知――インターネットという「間テクスト性」を本質とする世紀ともなれば、この傾向はますます強まるにちがいない。

以上のような読書の生態系の変化があいまって、「かたい本」は存続の危機にある。かつて、もうひとつの「かたい本」の追放について語ったのは、ヴィクトル・ユゴーであった（『ノートルダム・ド・パリ』）。大聖堂のような「かたい建築物」が引き受けていた、「人類の大いなる書物」という使命を、活版印刷術という柔らかいメディアが奪ったというのだ。しかしながらいまや、石という固いメディアから知の構築物の座を引き継いだはずの書物が、なんとも皮肉なことに、「かたいメディア」になりかけている。そしてネット空間を浮遊するところの、限りなく柔らかく(11)なメディアにおびやかされているのだ。

イリイチが、中世における「祈りの読書」から「学びの読書」への変容を、「巡礼の旅」から「観光ツアー」への変化だと皮肉っていたけれど、インターネット時代の読書は、もうひとつの観光ツアーなのかもしれない。ともあれ、なにやら読書環境がスコラの時代にでも逆戻りしたような錯覚にとらわれるのは、わたしだけなのだろうか？

（宮下志朗『書物史のために』による）

注　スコラ……中世ヨーロッパの教会・修道院付属学校や大学の教師たちが研究した学問。　ラブレー……フランス・ルネサンスを代表する作家。　パンタグリュエル……ラブレーの小説の主人公。　ベンヤミン……ドイツの批評家（一八九二～一九四〇）。　フーコー……フランスの哲学者・歴史学者（一九二六～一九八四）。　ニューアカ……ニュー・

アカデミズムの略で、一九八〇年代初頭に日本で起こった人文・社会科学の領域における思想上の流行。　ヴィクトル・ユゴー……十九世紀フランスの詩人・小説家・劇作家。　イリイチ……オーストリア生まれの思想家（一九二六～二〇〇二）。

〔問一〕 傍線(1)(3)(6)(10)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕 傍線(4)(5)の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

〔問三〕 傍線(2)「こうした傾向」に当てはまらないものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A　古典テクストの原典にあたるよりも、集成や詞華集を読むことですませるようになった。

B　蔵書目録のような参照機能が備わった図書館で、知的情報が簡単に得られるようになった。

C　「聖なる読書」に代わり、勉学のための「俗なる読書」が前面に出てくるようになった。

D　文庫本の元祖までも発明して、できるだけ多くの知識を迅速に手に入れるようになった。

E　古典テクストの意味の解明に努めるよりも、討論での勝利に熱中するようになった。

〔問四〕 傍線(7)「電脳空間におけるテクスト概念」の説明に当てはまるものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A 読者がみずからの読みによって作品世界との境界線を明瞭にできるテクスト。
B 読者が軽やかに浮遊しながら生成に関与することができるテクスト。
C 読者が反省をおこなうことができる知のパラダイムに連なるテクスト。
D 読者が熟読してみずからの精神を涵養させることができるテクスト。
E 読者がみずからのアイデンティティを問いなおすことができるテクスト。

〔問五〕 空欄(8)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 理念的　B 社会的　C 表面的　D 本質的　E 潜在的

〔問六〕 傍線(9)「「かたい本」の読者が再生産されにくい構造」とはどのようなことか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A テクストを正しく理解するために原典を重視しようとする構造。
B テクストの強制的な選別が良書の重視を不自由にするような構造。
C テクストを統合する機能として作者を意識化・対象化する構造。
D テクスト空間の中で果てしなく恣意的な漂流を可能にする構造。
E テクストを自分の好きな場所で自由に読みふけることのできる構造。

〔問七〕 空欄(11)に入れるべき漢字三字の語句を、本文中から探し出して答えなさい。

〔問八〕 次のア～オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　中世ヨーロッパで大学が誕生した時期には、読書の形態が次第に「黙読」から「音読」へと変化した。

イ　中世期に大聖堂が担っていた書物としての役割を、ルネサンス期には活版印刷術というメディアが受け継いだ。

ウ　ルネサンス期のユマニストたちは、印刷されたテクストを流布させることで、知識の獲得を称揚した。

エ　現代のフランス人にとっての古典は、国家のアイデンティティを支える「正典」としての作品と重なることが多い。

オ　インターネット時代の読書は、テクストを何度も「味読」してその意味を正確に把握しようとする傾向にある。

二　次の文章は二〇〇四年に刊行された『マンガ学への挑戦』の一節である。これを読んで、後の問に答えなさい。（25点）

アニメやマンガという大衆文化を、どう位置づけるのかは、もっとも枠組み問題を意識させるテーマである。海外進出報道がもたらした日本固有文化論の傾向は、「マンガの元祖は北斎漫画や鳥獣戯画だ」という「［　(1)　］」な起源論言説を容易にひきよせるが、この言説自体が明治国家の成立と国民国家的文化再編の過程で、ナショナリズム確立の必要性というバイアスを受けて成立したものであった。

これについては、宮本大人（ひろひと）の歴史研究がようやくじょじょに成立過程を検証しつつあるが、まだ一般的には知られていない。日本固有文化論への対抗的な意味からも、私は、マンガ・漫画を近代社会において成立した混交文化、「西洋の衝撃」による異文化衝突的な現象のひとつとしてとらえるべきだと思う。

近代漫画の成立には近代化過程の社会的諸条件の整備（印刷技術、新聞の流通、教育による標準的読解力の成立、市民層の成立など）が不可欠だし、とくに大衆社会的な説話媒体である複数コマによる物語化は、米国コミックや映画文化の影響、日本社会の欧米化が不可欠だった。

現代のマンガの表現構造も、それを支える雑誌、単行本形式も、流通、市場、読者のリテラシーも、日本の近世からの流れを一度断絶した歴史（日本近代史）を前提に成り立っていると考える。したがって、個々の要素としては連続性を認めても（日本語の読みの方向、漢字かな構造と縦読み印刷の伝承などが、マンガの視線構造、コマ構成を左右しているのは事実である）、全体としてマンガは近代的大衆媒体の表現文化と位置づけるべきだと思う。

宮本は、近世までの絵と文字が混在する形式、戯画そのものがダジャレなどの意味をもち（判じ絵）、文字も絵の解読をまって理解できる相互依存の様式が、近代化されるにしたがって絵を自立させ（同時に「漫画」の、美術の下位概念化が進む）、文字を分離させて、近代漫画の様式を成り立たせたとしている。

文と絵の融合した表現が、「文学」と「絵画」に分かれていくとき、「絵画」の一種としての「漫画」が現れてくる。「漫画」の形成過程を乱暴に要約してしまえば、そう言うことができる。だが、ここで忘れてはならない事実がある。「漫画」からは決して「文」という要素が完全に排除されたわけではないという事実である。文体は変わり、吹き出しなどで画然と囲い込まれることが多くなったとはいえ、画面の中に文字が配されることが無くなったわけでなく、画面脇の文も、「絵画」の通常の題名以上に大きな質と量をもつことが多い。

「漫画」は、「絵画」のサブジャンルでありつつ、サブジャンルであることによって、「絵画」の本流とは区別されるものになっていく。その区別は、普通、それが新聞・雑誌などのジャーナリズムを場として、印刷という複製技術を介したものであることによるとされてきた。しかし、より重要なのはそうした事と関わって、「漫画」における「文」という要素の役割が、純粋なる「絵画」と比べて大きすぎるという点なのである。

こうして[2]「漫画」とは、分かれ行く「文学」と「絵画」の純粋化のかたわらに産み落とされた、不純にして曖昧なる領域であったということができる。「美術」としての「絵画」の一ジャンルであろうとしつつ、完全にはそうなりきれなかった、その領域は、以後、その不純さと曖昧さをより増大させることで、怪物的な成長を遂げることになる。

（宮本大人「『漫画』の起源　不純な領域としての成立」）

宮本によれば、「漫画」の「絵画」サブジャンル化過程は、黄表紙などにおける戯作者―画工の共同性の崩壊と、漫画家が近代的な画家の余技と化していく過程と対応している。宮本をして近代漫画成立過程の検証へと向かわせたマンガ起源論、あるいは近代マンガの定義問題は、日本マンガの強い影響下に独自のマンガ文化を作りつつある東アジア諸地域においても、ほぼ同型のアイデンティティ問題をひきよせている。

たとえば韓国では古代にさかのぼって自国のマンガの元祖を定義し、日本マンガの影響を排除した「純粋な韓国マンガ」を模索する論調がある。大なり小なり、タイやインドネシア、中国にも似た傾向が見られると思われるが、そもそも百パーセント純

粋な民族の伝統文化など、ありうるだろうか。それは、百パーセント「独創性」だけで成り立つ創作物のように、論理的には成り立たない想定ではないのか。たしかに、ある地域の住民が歴史的に同じ傾向の意識や行動様式をもち、同じ言語によってそれを伝えていれば、それら総体をその地域の固有な文化とよぶことはできる。

が、かなり孤立した地域でも、何らかの外部との交流や衝突を異文化間でおこなってきているはずであり、文化という意味と価値の束には、必ず異文化との交渉史が隠れているはずだ。まして、マンガのように明確に混交性が見られる場合は、むしろ異文化混交的な現象と見なしたほうが妥当ではないかと思われる。東アジアには近代先進国家として対し、欧米に対してはオリエンタリズムを強調する二重性をもってやってきた近代日本は、一九九〇年代に入って、(3)マンガやアニメにおいても無意識に同じ戦略をとろうとしているように見える。けれど、とりわけ大衆文化においては、優越従属の論理ではない「混交の論理」で異文化関係を考えることが可能だと私は思う。

マンガやアニメの「日本固有文化論」的枠組みの強調には、近代日本の国家、国民としての文化的アイデンティティ確立の欲求の歴史が反映しており、それは日本人の世界とのかかわりにおける根深いコンプレックスにつらなっている。このことを対象化するためにも、私は異文化混交の視点からマンガをとらえ、かつそれを日本固有のスタイルであるかのように回収しない論理が必要であるように思える。もちろん、日本マンガの独特な発展と固有な表現構造そのものは、研究対象として存在するだろう。ただ、それを「日本固有文化」の歴史的連続性だけに還元するのではなく、社会学的な条件による分析と、文化の混交性の側面からも同時に語ることのできる枠組みを追求すべきなのだと思う。

しかし、そもそも「文化」とは何だろう。文化は、民族国家レベルに想定される場合もあれば、特定の階層や集団、分野をさして、たとえば若者文化、オタク文化、マンガ文化などと使われる場合もある。が、そこで「文化」とよばれているものに、はっきりと線引きのできる範囲や境界があるわけではない。ことに大衆文化においては、古典芸能などの伝統文化とちがって「文化」という観念の集約性、自律性は低い。文化の境界性は閉じておらず、伝統的な規範性も低く、容易に周辺領域と相互侵犯をおこす。そして、そこにこそ (4) ［　　］ がある。

マンガもまた、明治期に欧州型の新聞とカリカチュア形式が入ってきて、江戸期の伝統と混交して近代漫画が形成されていく。漫画の表現は近代化にともなって変容をとげ、それなりに日本型近代漫画を成り立たせた。やがて、大正・昭和期に米国などのコミック形式の影響を受け、戦後物語マンガの原形をなす。この経緯には、あきらかにどれが主でどれが従と見なせない混交性があり、まさにそれがマンガなどの大衆文化の特性でもある。

このとき、「文化」とは、ある分野を市場として社会に成り立たせる商品と表現形式の全体を包みこんでいいあてようとするレッテルにすぎない。たとえていえば、山脈をながめて、そこに何々山という固有名を名指すようなもので、裾野は他の山と連続して見分けがつかない。けれど、そのように名指して見分けなければ、山を認識し、登ることもできないのである。また、山脈という上位のカテゴリーと別の名をもち、かつ関連づけられなければ地図を作ることもできないだろう。要するに「文化」とは、ある距離や観点からながめた、ある程度共有された傾き、意味や価値の束を表象する言葉であり、うっかりそれを実体視したとたんに矛盾をきたすようなものだ。ことにマンガのような大衆的な領域で文化を語るときには、それまでの近代期に形成されてきた純粋芸術的文化概念の矛盾が出やすいことは、すでに見てきた通りである。

（夏目房之介『マンガ学への挑戦』による）

注　宮本大人……漫画史研究者（一九七〇年～）。　リテラシー……読み書きする能力。識字能力。転じて情報を活用する能力も指す。　判じ絵……文字・人・物などを他のものに紛らしてかき込み、それを探して当てさせる絵。
黄表紙……江戸時代に流行した風刺や滑稽を狙った大人向けの絵入りの読み物。　オリエンタリズム……西洋側から見た幻想的な東洋像。

〔問一〕　空欄(1)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　革新的　　B　即物的　　C　普遍的　　D　伝統的　　E　観念的

〔問二〕 傍線(2)「「漫画」とは、分かれ行く「文学」と「絵画」の純粋化のかたわらに産み落とされた、不純にして曖昧なる領域であった」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 絵と文から構成される近世の戯画が近代以降は「文学」と「絵画」に分離したため、「漫画」は絵と文による相互依存の古典的な様式を保つサブジャンルとして成立した。

B 絵と文から構成される近世の戯画が近代以降は不純なものと見なされたために、「漫画」は「文学」と「絵画」の両方の要素をもつ矛盾したサブジャンルとして成立した。

C 絵と文の混在する近世の戯画の様式をもつ「漫画」は、近代以降において「文学」と「絵画」が自立したことで、文の要素が大きい、絵画のサブジャンルとして成立した。

D 絵と文から成る近世の戯画から生まれた「漫画」は、近代以降に西洋の「文学」や「美術」が広く普及するにしたがい、複製技術的な要素の強いサブジャンルとして成立した。

E 絵と文から成る近世の戯画から出発した「漫画」は、近代以降の西洋による「文学」と「美術」の急激な流入によって、その評価基準が一定しないサブジャンルとして成立した。

〔問三〕 傍線(3)「マンガやアニメにおいても無意識に同じ戦略をとろうとしているように見える」とあるが、「同じ戦略」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A マンガやアニメを東アジアの国々に対しては普遍的なものとして自負し、欧米の国々に対しては自信をもてずに卑下した態度を取ってしまうこと。

B マンガやアニメを欧米諸国に対しては独自なものと誇示し、東アジアの国々に対しては相互の文化交流に役立つものとして普及に努めること。

C マンガやアニメを東アジアの国々に対しては優れた独自の文化として誇り、欧米諸国には異国趣味的な価値を認めてもらおうと懸命になること。

D マンガやアニメを欧米諸国にも東アジアの国々にも、その異文化としての希少性を認めさせようと積極的に市場に乗り出そうとすること。

E マンガやアニメを東アジアの国々には優越感をもって臨み、欧米諸国には異国趣味的な文化的価値のあるものとして自信をもって示すこと。

〔問四〕 空欄(4)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 大衆文化の活性

B 文化一般の卓越

C 大衆文化の背理

D 文化一般の価値

E 大衆文化の弱点

〔問五〕 この文章の趣旨としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　大衆文化として隆盛している現代の「日本マンガ」は、近世や近代の漫画と断絶することによって、その独自の文化を形成することができた。

B　大衆文化とは「山脈と何々山」のように上位のカテゴリーと固有名との関係性に基づくものなので、「マンガ文化」という観念も便宜的なものにすぎない。

C　マンガなどの大衆文化は各国の文化的固有性を明確に打ち出さなければ、競争の激しい現代の市場経済のなかでその存在意義を示すことができない。

D　大衆文化としてのマンガは、自国だけでなく他国との間での文化的な接触を経験することによって、かえって純化され独自性のあるものとなる。

E　新興ジャンルである「マンガ文化」の雑種性を理解するには、近代期に形成された純粋芸術的な文化概念を用いることが重要な鍵となる。

三　次の文章は、かつて平治の乱で敗れて、難波三郎経房によって斬首された源義平（悪源太）が、雷となってその恨みを晴らす場面である。これを読んで、後の問に答えなさい。（30点）

ある時、清盛、遊覧のために一門侍ども数十騎うちつれて、布引の滝へ上りける。難波三郎は「夢見あしき事候ふ」とて、その日は宿所に籠もりゐけり。傍輩ども申しけるは、「弓箭取る者の、夢見・物忌みぞなどといふ事、口惜しき恥辱ぞ」と笑ひければ、げにもと思ひけん、おくればせに出で来けり。布引の滝見てかへられける山の麓にて、にはかに風あらく吹き下ちて、空かきくもり電しきりにして、雷、雲をひびかす。難波、色をうしなひて、傍らなる者に申しけるは、夢見悪しかりつるはこの事なり。悪源太がきられし時、はては雷に成りて蹴殺さんといひし面魂が、常におもかげに立ちておそろしかりし心にや。夜も夢に見えつるなり。鞠ばかりなる物のひかりて、巽の方へ飛びつるをば、人々は見給ひけるか。悪源太が霊かと、心におぼえつるなり。それが帰りさまにぞ、経房は一定蹴殺されぬと覚ゆる。命のあらんかぎりは、雷にてもあらばあれ、一切りは切らんずるぞ。あとの証人に立ち給へとて、太刀を抜く。案のごとく、難波が上に黒雲うづまき降つて、雷、鳴りさがりけり。清盛もあやふく見え給ひけれども、弘法大師の御筆の理趣経を錦の袋に入れて、頸にかけられたりけるを、うちふりうちふりし給ひければ、雷、鳴りあがりて、清盛はたすかり給ひけり。難波は蹴殺されてありけるを、雲散じて後、おのおのよりて見ければ、五体、千々にきれて、目もあてられぬ形勢なり。太刀は鍔まで煮えかへりたりけり。大師の御筆だにも守りにかけたまはずは、清盛もうせ給ひなまし。

昔、北野の天神は、配流の恨みに雷を起こして、本院の大臣を罰し給ふ。これは、権化の世に出でて、讒佞の臣を退けられ、忠臣を賞ずべき政をしめさんがためなり。今の悪源太、廃官の将となりて、白昼に誅せられしを憤り、雷となりて難波を蹴殺しぬ。「しらず、いかなる根性にて、遺恨を死の後に散ずらん」と、おそるる人も多かりけり。

（『平治物語』による）

注　弘法大師……空海。　理趣経……真言宗の経典。　北野の天神……菅原道真が死後祭られてなった神。
本院の大臣……藤原時平。　権化……姿を変えてこの世に現れた神仏。　讒侫……目上の人にへつらい、他人を中傷すること。　廃官……官位を失うこと。

〔問一〕傍線(1)「にして」と文法的に同じものとして、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　我が身一つはもとの身にして（伊勢物語）
B　時雨の雨をたてぬきにして（古今和歌集）
C　いかにして都の貴き人に奉らむ（源氏物語）
D　道にして、馬盗人ありて（今昔物語集）
E　月日は百代の過客にして（奥の細道）

〔問二〕傍線(2)(4)(5)の解釈として、もっとも適当なものを左の各群の中から選び、符号で答えなさい。

(2)「色をうしなひて」
A　恐ろしさで意識を失って
B　驚きのあまり顔色を変えて
C　失望によって恋心を無くして
D　稲光によって視界が無くなって

(4)「一定蹴殺されぬ」

A 一旦は蹴られてしまう
B きっと蹴り殺されてしまう
C ある程度まで蹴られてしまう
D 皆同じ様に蹴り殺されてしまう

(5)「あとの証人」

A 私の正当性を後に主張してくれる人
B 私が避難した場所を記憶してくれる人
C 私の死後家族の後見人となってくれる人
D 私が雷と戦ったことを後に伝えてくれる人

〔問三〕傍線(3)「申しけるは」が導く会話文はどこで終わるか。その終わりの五文字を本文中から抜き出して答えなさい。

〔問四〕傍線(6)「大師の御筆だにも守りにかけたまはずは、清盛もうせ給ひなまし」の口語訳として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 大師の書をお守りとしてお掛けなさらなかったので、清盛さえもお亡くなりにはならなかったのだろう。
B もし大師の書だけでもお守りとしてお掛けなさらなかったならば、清盛もお亡くなりになっていただろう。
C 大師の書をお守りとしてお掛けなさらなかったのは、清盛をもお亡くなりならせないためだったのであろう。
D せめて大師の書だけでもお守りとしてお掛けなさらなかったならば、清盛もお亡くなりにならなかっただろう。
E 大師の書さえもお守りなさるために駆けつけなかったのだから、ましてや清盛もお亡くなりにはならないだろう。

〔問五〕 傍線(7)「北野の天神は、配流の恨みに雷を起こして、本院の大臣を罰し給ふ」とあることを、『大鏡』では次のように記している。この『大鏡』のなかの本院の大臣の行動にならったと考えられる経房の行動を、本文中から五文字で抜き出して答えなさい。

また、北野の、神にならせ給ひて、いと恐ろしく神鳴りひらめき、清涼殿に落ちかかりぬと見えけるが、本院の大臣、太刀を抜きさけて、生きてもわが次にこそものし給ひしか。今日、神となり給へりとも、この世には、われに所置き給ふべし。いかでかさらではあるべきぞと、にらみやりてのたまひける。（『大鏡』「左大臣時平」）

〔問六〕 傍線(8)「しらず、いかなる根性にて、遺恨を死の後に散ずらん」とはどういうことを言っているのか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 悪源太が自らの恨みを死後に晴らしたのはどんな性分によっているのかを、人は知ることはない。
B 北野天神も悪源太もともに落雷によって自らの恨みを晴らしたということを、人は知ることはない。
C 北野天神も悪源太もともに落雷によって自分勝手な論理で自らの恨みを晴らしたのは、理解に苦しむ。
D 北野天神が示した本来の政にならわずに、悪源太が逆恨みで遺恨を死後に晴らしたのは、理解に苦しむ。
E 北野天神が正当な政を示した一方で、悪源太が逆恨みで遺恨を死後に晴らしただけなのは、理解に苦しむ。

(

(